

ジャパニーズ・アメリカ

日比嘉高著

ひび・よしたか 72年生まれ。
名古屋大学院准教授。著書に
「入国」表象の文学史」など。

評 成田龍一

日本女子大教授

移民の経験は、生地の歴史に含まれるのか、それとも出先の国の歴史の一環となるのかと尋ねられたら、どう答えるであろうか。また、移民の書く文学は、日本文学か、アメリカ文学であるのか？

このとき、著者はこつた問いそのものを、(移民をどこに)「帰属」させる思考として斥け、あらためて移民そのものの営みに向き合おうとする。タイトルはそのことを示し、「日本」「アメ

日系移民文学に新視野

リカ」といったときの自明性を問い直すところにあるという。そして、日系アメリカ移民たちの文学を介し、かれらの経験を歴史的に考察する。

カギとなるのは「移動」と、そのことによる「越境」。対象とする北米への移民は1880年代に開始され、1910年代ころから定住志向が強まり、1924年まで継続する。アジア・太平洋戦争のさなかには、日系人は強制収容所で暮らすことになったが、その時期を通じての移民たちによる活動―日本語による文学作品が取り上げられる。アメリカで発行された日本語新聞に投稿された短歌をはじめ、一世の作家・翁久允、アメリカ生まれの二世作家・中島直人らの作品が読み返され、その想像力に言及し、かれらが「移民」と「日本人」という矛盾した二重性を生きてい

くさまを読み取っていく。

とともに、これまで日本文学として扱われていた作品も、この視点から再解釈される。たとえば、若き日の永井荷風の「あめりか物語」。荷風は日本に居住し日本作家と目されるが、この作品は在米中に書き継がれていることから「在米日本人の作品」として読み返される。そして、この作品は「日本文学」といいうるかか問いかけるのである。こうして、移民文学の考察によって、日本やアメリカの境界が揺るがせられる。

さらに、人とモノと情報のネットワークに目を向け、メディアとしての日本語新聞、流通の要となる書店を論じており、本書は狭義の文学研究の枠を超えている。思考をゆさぶる、読みごたえのある一書である。

